



TITLE:

<雑録> 鶏鳴山北魏石佛の發見

AUTHOR(S):

水野, 清一

---

CITATION:

水野, 清一. <雑録> 鶏鳴山北魏石佛の發見. 東洋史研究 1939, 4(4-5): 388-388

ISSUE DATE:

1939-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138797>

RIGHT:

# 鶏鳴山北魏石佛の發見——雲岡の北

魏石佛は有名であるが、今回新しく北魏の石佛が察南の鶏鳴山で發見された。

場所は京包線下花園驛の東二キロ、線路の北側十メートルばかりの山側で、下花園炭鐵事務員の發見にかゝる。洞穴の入口は約一メートル四方、廣さは十疊數位、高さ一メートル半。石佛は泥土にうもれこの奥壁に高さ一尺餘の首だけを出してゐる。周圍の壁面には無數の小石佛、つまり千佛が彫られてをり、天井には直徑二尺餘の蓮華を中心にして、飛天の浮彫がある。この報にもとづき、察南政府ではたゞちに人を派して發掘作業を行つてゐるが、この地における洞窟は必ずしもこれだけであるまいと、なほ搜索がつゞけられてゐるといふ。

これは五月二十三日の讀賣新聞に出たところであるが、そのかゝげた寫眞には佛龕の幔幕と佛頭とがうつつてをり、全く北魏式の石窟であることがわかる。この鶏鳴山は洋河と桑乾河の合流點に屹立した山で、あま

り高くはないがほど圓錐形に見える特異なる山で、行人の注意をひく、多分石灰岩の山だ。と思つたが、その山腹に石炭が出る北魏の『水經注』には鳴雞山となつてゐる。そして戰國時代に趙襄子が代王を殺し、代王夫人となつてゐたその姉を迎へようとしたところが、夫人はこの山に至り、笄を磨いて自殺し、代王に殉じたといふはなしを傳へてゐる。それでこの山を磨笄山といひ、その祠があつたのであるが毎夜野鷄がこの祠の屋根の上を集つて鳴くので鳴雞山といふやうになつたといふ。

これが山名の由來であるが『魏書』后妃傳には、高宗文成帝の乳母であつた昭太后常氏をその遺志により廣寧の磨笄山——俗に鳴雞山といふ——に葬り寢廟をたて、守陵戸二百家をおき、碑を樹てその德を頌美したといふから、これに關聯した石窟ではないからうか。文成帝はいふまでもなく、雲岡石窟の造營を最初にやつた天子である。

(みづの・せいいち)